
相談物語

刃下

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

相談物語

【ΖΖコード】

Ζ2892Ζ

【作者名】

刃下

【あらすじ】

八九寺が皆さんとの相談にのるはずのおはなし

1. 説明 (説明文)

塾がやさしい塾のねまなし

閑散とした教室内。

広い部屋の中にぽつんと置かれた四つの机。
二つずつ、向かい合わせで置かれている。

「何で僕はここに連れてこられたんだよ」

僕は向かいに座っている少女に疑問を投げかけた。

「ふつふつふつ、それはですね阿良々木さん。これから私が皆さん
の悩みをばつたばつたと解決していく、お悩み相談室をはじめるか
らですよ！」

少女は勢いよく椅子から立ち上がった。

おかげで元々塾だったこの教室の床と椅子の足がこする音が部屋
中に鳴り響く。

「へー」

僕は小指で鼻くそをほじりながら、八九寺の熱弁に耳を傾けた。

「私は仕事柄よく街をぶらついているのですが、道で会うすべての
人が暗い顔をしています。この世は不景気。皆さんが意氣消沈な
も分かります。誰しもが心のどこかに悩みを抱えているのです。そ
こ・で、この八九寺まよいが皆さんの相談にのるうではないかと思
い、立ちあがりました！」

八九寺はどこかの大統領みたいに大袈裟に身振り手振りを交えて説
明する。

ていうが、お前が街をアリのように歩き回っていたのは仕事だった
のか。

「何故こんな茶番を繰り広げているのかは分かったよ。でも言つま
ど皆、暗い顔してるか？」

「しますよ！そんなマヌケ面しているのは厚顔無恥でブルジョワ

な阿良々木さんくらいのものです」

「ぐつ・・・じゅあなんでそのマヌケ面した僕はここに呼ばれたん

だよ。僕の悩みを聞く必要はないじゃないか

「ええ、阿良々木さんの相談にのる気はありません。それは解決できることですから」

ハ九寺は声のトーンを落としながら言った。

えらく簡単に僕の悩みを諦めてくれるじゃないか。

まあハ九寺には吸血鬼について少なからず教えているからな、気をつかってくれたのかもしれない。

「どうせ阿良々木さんの悩みなんて、妹さんに手を出しそうだとか、彼女の後輩に手を出しそうだとか、妹の同級生に手を出しそうだとかそんなことなんですから」

「違うわ！」

「気なんて一つも使っていなかつた。

「まさか小学生である私に手を！？」

「・・・」

「否定して下さい阿良々木さん、怖すぎますー！」

「それで結局のところ僕はなんで呼び出されたんだよ

「ああ、そうでした。阿良々木さんには私の助手になつていただこうと思いお呼びしたのです

「助手だつて？」

僕は眉間にしわを寄せながら、ハ九寺の次の言葉を待つた。

「ええ、助手です。嫌ですか？」

「嫌つていうかさー。何するんだよ、悩み相談の助手つて」

「そうですね、例えばお客様が来た時にドアを開け閉めしたりですとか、万が一悩み相談で私がまずい事を言つた時も、助手である阿良々木さんが横でうなずいていれば、多少なりと信憑性が上がつてお客様をうまく騙せるかもしれないじゃないですか」

ハ九寺は笑顔で恐ろしいことを言った。

なんだその第三者を使った心理誘導は。

まるで詐欺師や宗教勧誘の常套手段みたいじゃないか。

「僕はそんな詐欺行為のようなことはしないぞ。だいたいお前の言ったる助手は世間では雑用、あるいはさくらって言つんだよ」

「阿良々木さん。阿良々木さんは今、助手といつ職業がどれほどホットな職業なのか知らないようですね」

「何つ！？」

八九寺は、はあっとため息をつきながら僕の側へと歩み寄る。

「助手。それはつまり誰かをサポートするための職。そのサポートの仕方によつては恋が芽生えることだってあるんですよ」

「な、なんだつてえ！？」

「ある時はアメリカ帰りの天才。またある時は人工的に作られた人型の女子高生ロボット。どうです、阿良々木さん。阿良々木さんも過去にメールを送つたり、黒猫と喋つてみたくはありますか！」

「ねーよ」

一人熱くなつた八九寺を見ていると、逆になんだか落ち着いてきた。「おほん、失礼しました。阿良々木さんなら意気強盗してくれると思いまして」

「意気強盗？」

「失礼、噛みました。意気投合してくれると思いまして」

「お前も普通に噛むことがあるんだな」

「ええ、返す言葉もありません・・・」

八九寺は腰を折り、深く頭を下げた。

「それにしても、急に呼び出されるから何事かと思つたよ」

「ええ、私も急な事なので阿良々木さんを捕まえれないかと思いました」

「八九寺、ら抜き言葉になつてるぞ」

「おつと、これは失礼しました。あぎさん」

「人の名前から、らを抜くな。僕の名前は阿良々木だ」

「失礼、噛みました」

「これはわざとだ」

「失礼、かままま」

「はなからひやんと聞ひつ connaîtないだら・・・」

「それでは阿良々木さん。わざわざお客様を呼んじやつてください」

「え、僕が呼ぶの?」

「当たり前じやないですか!呼ばずにこんな廃墟に入つてくる人なんて、ホームレスか警察ぐらいですよ。わざわざ、急いで呼んじやつてください」

「ああ・・・」

僕は携帯電話を開き、少ないメモリーの中から一つを選んだ。

一話目（後書き）

これは不定期更新
よかつたら他のも見てね

1. 例題（複数形）

このこのおかしいかもしない
でもきっとだいじょうぶ

「それで、どうしてそのお悩み相談に私が呼び出されなきゃいけないのかしら阿良々木くん」

眼光鋭く僕を見据えた戦場ヶ原。

「いや、本当に悪いと思つてるよ」

手を合わせながら頭を下げる。

「阿良々木君、私の記憶が正しければ今日のあなたは自宅で勉強をしていらっしゃるはずよね」

「うつ・・・」

数学以外のテストの点数が平均点の真上を這つほどに悪かつた僕はある日からクラストップの羽川と成績優秀の戦場ヶ原に交代制で勉強を教わっている。

順番的に言えば今日は羽川の順番なのだが、用事があるとかで自宅での勉強を言い渡されていた。

携帯メールでページから問題番号まで指定して、羽川が考えるこれなら一目でこなせるだらうといつ絶望的な量の課題が出された。

驚くべきことに僕がつまずきそうな問題を先読みして解説まで書いてある。

もしかして羽川は僕の買つた問題集の中身を全部暗記しているのだろうか？

羽川ならあり得なくもないな。

「そこままでしてもらつておいて、全く手をつけていなかつたら流石の羽川さんも怒るんじゃないかしら」

「ごもつともござります・・・」

あまりに多い課題に、昼飯食べてから本気でやるうなんて現実逃避して午前中は全然机につかなかつたもんで、今日はまだ問題集を開いてすらいない。

それもこれもこのドアの向いに立っている年中生足のツインテイルのせ

いだ。

「猫を殺せば七代祟ると云うけれど、猫に殺されたら何代先まで祟
ればいいのかしら? ね、阿良々木くん」

「ぐつ・・・何でそこで猫が出て来るんだよ」

「さあ、何故かしら?」

戦場ヶ原は涼しい顔で笑った。

「・・・それにしても気合の入った格好で来たんだな」

戦場ヶ原はスカートをひらりと揺らし、側にじりじりと寄ってくる。
今日の戦場ヶ原は戦場ヶ原の家で勉強会をする時とは違う、よそ行
きの衣装だ。

「阿良々木君にしてはいいとにかく気がつくじゃない。理由を教えて
欲しいのかしら?」

「ん、まあな・・・」

「阿良々木くん、ここに来るまで一切呼び出した理由を言わなかつ
たでしょ? そしてメールにはここに来て欲しいとしか書いてなかつ
たわ」

「そうだな、確かに悩み相談うんぬんを伝えてなかつたのは悪かつ
たよ」

「次のメールには忍野さんは不在だと書いてあつた。つまり私は廃
ビルには阿良々木君しかいないと思っていたの」

戦場ヶ原は白い指で僕のアゴをくいっとあげる。

まさか・・・。

「私は阿良々木君に廃ビルで一人きりで会いましょうと誘われたん
だつて勘違いしてここまで来たの」

「すごく怒つてらつしやる!」

戦場ヶ原は僕の髪の毛を一本つまむと、僕の目を見つめながらゆつ
くり引き抜いた。

「す、すいませんでした」

空笑いと冷や汗が同時に出てる。

しかし謝罪は戦場ヶ原に届かなかつた。

「私もう阿良々木君殺しちゃつてもいいわよね。これだけの辱めを受けて・・・あつでも駄目か。阿良々木君すぐ再生しちゃうし。それに阿良々木君を殺しちゃつたら私は自分を殺さなきゃいけなくなるわ。どうしよう・・・うふふ」

目の前の彼氏が死んだ後の想像をする戦場ヶ原が自分の世界から戻つてくるのを待つ。

「阿良々木さん、ちょっときてください」

ドアを少しだけ開けて、ハ九寺が僕を呼び出した。

「何だよ、ちゃんと呼んだぞほら」

「ほらじゃないですよ、阿良々木さん。とりあえず緊急に申し上げなければいけないことができました。阿良々木さんだけ入ってきてください」

「どうした?」

実は僕が政府に作られた人工のアンドロイドで、代わりなら何体でもいるというところまで空想が進んだ戦場ヶ原を置いて、教室の中に入った。

「阿良々木さん、何でよりにもよつてあの方なんですか」

「お前が誰か呼べって言つたんだ」

「言いました、言いましたけど」

ハ九寺はため息をつきながら、僕を諭すように続ける。

「あの方、私のこと見えないし私の声も聞こえないでしょ」

「あつ」

うつかりしていた。

そういうえば戦場ヶ原つてハ九寺の姿見えないんだつけ。

まずいな、このまま行くと戦場ヶ原が僕に悩み相談をしていくだけになるぞ。

プライドの高いあいつのことだから、最悪何の悩みも打ち明けないつてことも考えられるし。

「はあ・・・」

ハ九寺はもう一度ため息をつき、置いていたリュックサックを背負

いなおした。

「もういいです、阿良々木さん。私は他の教室に行つてるんで、どうぞお一人でちちくりあつて下さい」

足元を見ながら、ぽつぽつと歩き始める八九寺。

悪い事したなあと思ったが、僕にも疑問が一つ浮かんだ。

僕が呼べてお前が見える相手で誰だよ」と

ハ力寺はその場でひたすら歩ぐのをやめて、首だけ振り返る。
「羽川さん、どうもありがとうございました。」

「羽川は今田用事でハハハ。だから僕が二二二に呪われる訳だし、

「え、 そ う なん で す か？」

僕とハ九寺は一緒に固まってしまった。

「…………」と僕が呼べてお前が悩み相談にのれる相手なんて

いな
いん
じや
な
い
か
?」

「てんまつほんといだしたね」

「それを言うなら本末転倒な

二人で顔を見合わせて笑う。

ないない阿良々木さんの友達の少なさがこの問題の起因じゃないですか！

と思つた

そのまま子供の喧嘩に発展する。

「じたばたと何をやつているの阿良々木君」

自分の世界から戻った戦場ヶ原が、教室内の騒がしさに気がつき入

つてきた。

まずい、このままだと僕は一人で取つ組み合いをするやばいやつにならう。

なにて少捕はれ。

僕は八九寺から離れようとするが、八九寺はいまだ猛獸の如く僕に

噛み付こうとしていてなかなか離れない。

「うなれば一回揉みしだいて動きを止めるか？」

「阿良々木君、・・・一体何をしているのかしら・・・」

「ちょ、待ってくれ戦場ヶ原。今やめるから」

「小学生女児に何をやっているのか、説明してくれるかしら阿良々

木曆君」

「「え！？」」

喧嘩はあっけなく止まつた。

11話目（後書き）

不定期更新です

よかつたら他の書いたやつも見てね

二) 読み (読書や)

相変わらずおかしい気がする
おかしくない気もある

「へえ、この子があの時のハ九寺ちゃん

「そ、そりなんだよ」

向かいの席に座っていた戦場ヶ原は僕の胸倉を掴み三角定規の先を眼球に触れるか触れないかまで突き出したところであつやく僕の言葉に耳を傾けた。

「なんだ、それならそいつと私が動き出す前に言こなさこよ。もつ少しであなたの眼球の南半球が消滅するとこりだつたわ」

僕が席についてから第一声を発し終わる前にお前が動き出したんだろ。

「と、とつあえず分かつてもらえたんなら、僕の田の前にあるそれをさつさとびひけてくれ

「ええ」

冷静になつた戦場ヶ原は、三角定規を服のどこかへしました。

「それにしても変ですね

隣に座つたハ九寺が首をかしげてうーんと唸り声をあげた。

「どうして戦場ヶ原さんが私の姿を見ることができるのでしょうか

「な、不思議だよな」

「うーん、これは難問です」

僕はしわの寄つた首元をなおしながらハ九寺を見た。

悩んでいる最中、ハ九寺は首を上下に揺らし一緒にツインテイルもぴょこぴょこと上下に跳ねる。

近くで見ていると無性に触りたくなるのは僕だけだろうか。

「先に言つておくわ、阿良々木君。前も言つたけど、私は子供という存在が嫌いなの。それは相手が生きていくくて、幽靈であつても。例外はなしよ」

「そんな言い方は、・・・(ないんじやないかな)」

言い返そうとするが、田の前の戦場ヶ原の顔が憤怒の色に染まって

いたため口もつてしまつた。

「ハ九寺真宵ちゃん、あなた阿良々木君のこと、吸血鬼についてもよく知つてゐるそうね。それにこんな『』つこ遊びまでしてえらく仲が良さそうじやない。気に入らないわ。あなた、私の所有物の何なのかしら？」

戦場ヶ原はすゞい目つきでハ九寺をにらみつけた。

「ひう」

ハ九寺はがたがたと震えて僕の後ろに身を隠した。

「・・・」

口を挟まないでおこな。

わざわざ自分からあの絶対零度の視線に晒される必要もあるまい。どうせ次は僕の番だ。

「阿良々木さん、何故黙つてゐるんですか。私のことをどう思つているかあの人伝えくださいよ」

僕の影に隠れているくせに、僕には強気なことを言つハ九寺。「どう思つてゐるって・・・んー、トラックに描かれた赤いふんどしつて感じかな。会えたらその日一日ラツキーみたいな」

「人のことを茶柱と同じにしないでください！忘れたんですか、私と阿良々木さんはくんずほぐれつで絡み合つた関係じやないですか！」

「阿良々木君、あなた・・・」

「ひつ、違う違う違う。ここにきて何言つてんだよハ九寺」

「私と揉みくちゃになつたじやないですか」

「おい、何言つてんだよ！あれば喧嘩しだだ」

「阿良々木君、舌を出しなさい」

「はいっ！」

僕は黙つて口を開けて、ベロを出す。

戦場ヶ原はおもむろに僕の舌先を指で掴んだ。

「ああ・・・あんえほう（あのお・・・なんでしょ）」

舌を突き出し、口を開けたままなので自然と喋つてゐる言葉がおかし

くなる。

口に刀を咥えたまま綺麗な言葉を喋るなんて絶対不可能だ。

「色々とハ九寺ちゃんに聞きたいことができたわ。阿良々木君は少し黙つていて頂戴。でないと舌を引っ^レこ抜くわよ」

いつの間にか左手には分度器を持っていたリアル闇魔大王。引っ^レこ抜くどころか切り落とす^レ氣まんまんだろ。

「えええ、えええ、ええおーー（やめて、やめて、やめりーー）」

「あら、それでも騒ぐのね。ならこの舌は今日の記念に私が貰つておくわ」

何の記念だよ。とか考えてるうちにどんどんと分度器が近づいてくる。

その時、半狂乱となつた戦場ヶ原のそで元からシャーペンが一本転がり出る。

ちゅうびよべ手元に転がつてきたシャーペンを取り、机に文字を書いた。

「あら、最後の悪あがきかしら。いいわよ、見てあげる」

戦場ヶ原はなおも分度器をかまえたまま、机に目を落とす。

『ぼくがすきなのはおまえだけだ』

「足りないわね」

『そのすらつとのびたながいあしがすきだ』

「んー、どうしようかしら」

『ぼくはツインテイルよりボーティルのほうが100ばいすきだ』

「ふむ」

僕は今にも切られそうな舌と一緒に結果を待つ。

戦場ヶ原は少し考えた後、

「いいでしょ、信じてあげるわ阿良々木君。一枚舌になる前でよかつたわね

と言つて僕の舌を解放した。

「はあ、はあ、はあ」

息を整えて、口の中に溜まりまくつた唾液を飲み込む。

「阿良々木君に私の指をツバまみれにされたわ

「そう言って、戦場ヶ原はその指を自分の口の方へと運ぶ。
え、なんだこれ。どうする気だ！？」

「10センチ、5センチ、どんどん近づいていく。

3センチ、1センチ、・・・そしてそのまま口を通り過ぎ、隣の席に置いてあつたハ九寺のリュックサックに塗りつけた。

「ぎやーー！何するんですか、私のリュックサックが阿良々木さんによつて汚されました！」

「つるさこいぞ元凶。自業自得だ」

それにはどう見たって僕というよりは戦場ヶ原の犯行だる。

「阿良々木さんは少女にこんなけがれを背負つて生きてゆけと言つんですか！鬼畜です！」

「誤解を招く言い方をするなー！」

「何で私服なのに文房具がいたるといひから出てくるんだよ
「急に阿良々木くんの勉強を見る事になつたら必要になるじゃない。
だからよ、当然でしょ」

「高校の勉強で三角定規や分度器は使わないだり
「阿良々木さん、私たちの関係はその定規と同じように三角関係で
すね」

「ややこしくなるから入つてくるな、ハ九寺」

「そうだとしても直角三角形で言つゝ〇度の部分に阿良々木君。そ
して60度のところに私がいるわ。あなたは遠く離れた30度のと
ころよ、お嬢ちゃん」

「そうですかあ？案外一等辺三角形なんぢやないですかねえ」

「阿良々木君、何なのこの子。ちぎりとつていいかしら」

「何を！？」

明らかに戦場ヶ原がおかしいのでカット！
よかつたら他のやつも読んでね

四組目（複数形）

ねかしへなぬとやかくとせりな

床が冷たい。

つまり今現在、僕の体のどこかは床と接していることになる。

それはどこか。

「ばりひざより下、すね部分だ。

「すいませんでした・・・」

その後、口論の果てに僕と八九寺はまた掴みあいの喧嘩に発展した。揉みくちゃになりながらも、

「揉みくちゃですって？何を揉んだのかしら阿良々木くん

・・・すつたもんだの

「阿良々木くん、わざとなのかしら？」

とりあえず色々あつて僕と八九寺両名は教室の真ん中で正座をせり

れている。

これが学校ならPTAに訴えるところだが、いかんせんここは廃ビルで、しかも塾跡だ。

訴えようにも今いるのは他の階にいる忍くらいだしな。

「反省したのかしら？」

戦場ヶ原は教師がよく持つている黒板を指すときの棒で僕の足の裏をつついた。

「ひぐつ！・・・はい・・・」

電流が走り思わずマヌケな声が出てしまった。

「よろしい、あなたは？八九寺ちゃん」

「・・・反省してます」

戦場ヶ原にびびっているのか、八九寺はいじけつつも素直に返事をした。

「だいたい阿良々木さんが私のプリティなリュックサックにいたずらをするから」

「何い？僕じやないだろ、やつたのは戦場ヶ原だろ」

「阿良々木さんの唾液がヌルヌルのがいけないんです！」
「なんだとお、言わせておけば。ナメクジなんか体中ヌルヌルじゃねえか！」

「勝手に私の殻を脱がさないで下下さい…」

「阿良々木くん」

戦場ヶ原が呆れた様な目で僕を見つめた。

「何だよ、僕は高校生の年上としてこいつに口の聞き方を…。
「阿良々木君、争いは同じレベルの者としか成立しないの」
戦場ヶ原はぴしゃりと言い放った。

「話を戻すけど、えつと悩み相談でしたっけ？」

「はい」

床から開放され、椅子に座りなおした。

戦場ヶ原は机に頬杖をついたまま少し考え込み、カツチラーメンが出来上がるくらいの時間が経ちようやく口を開いた。

「私、自分の悩みなんてないわよ」

きつぱりと言つてのけた。

「一つもか？」

「ええ、だつて私は阿良々木君と違つて優秀ですもの」

「ぐつ・・・」

言い返せないのが腹立たしい。

それにしてもこいつはどれだけ自分に自信があるんだ。

その様子を傍観していた八九寺がニヤリと笑みを浮かべた。

「ほうほう、なるほど。自分の悩みはないですか」

八九寺は知つた風な顔で言葉を並べ続ける。

「つまり、自分以外の悩みはあるんですね？」

「・・・そうね」

戦場ヶ原は八九寺の言葉にどこか不満げな顔をした。

「それはすばり阿良々木さん」

「ええ」

「何？戦場ヶ原の悩みって僕なの？」

「当たり前じゃない。私の唯一の汚点よ」

「お前、自分の彼氏をそんな風に思つてたのかよ！？」

「あら、阿良々木君は汚点よりも汚物の方が良かつたかしら？」

「どっちも同じようなもんだー！」

声を張り上げて抗議する僕をじつと見つめながら戦場ヶ原は言った。

「でも、私はその汚物の事が頬擦りしたいほどにいとおしいわ！」

「・・・」

二人とも無言が続き、僕の方が先に思わず微笑んだ。

本当、いつまで経つてもアピールの仕方がよく分からないやつだよ。

「つまり戦場ヶ原さんの前世はトイレットペーパーだったんですね！」

「八九寺、もうこの話は広げなくていいぞ」

「なるほどなるほど、私はだいたい分かつてきましたよ阿良々木さん」

八九寺はメモ帳を広げて何やら書き込みながら頷いた。

あれ、悩み相談つてこんな感じだつけ？

「分かつたつて何がだよ」

「何つて、阿良々木さん。ちゃんと戦場ヶ原さんの話を聞いていたかつたんですか？まったく。寝言は寝ていつてくださいよ」

「こいつに言わると何でも腹が立つてくるのは何故だ？」

「独り言は阿良々木さんくらい友達のいない人しか言つてはいけません」

余計なお世話だよ。

「本当に友達が少ない人間は普段喋つていないのでとつさな時に声が出ませんよね」

「それで余計に人が離れていく。最悪のサイクルだよな」

「これぞまさに離サイクル。つと、話が脱線してしまいました。つまり私が言いたいのは、何故戦場ヶ原さんが私の姿を見ることが出

「来たのか」

八九寺が仰々しく言う。

「戦場ヶ原さんは阿良々木さんとのことで悩んでいる、そうですね？」

「ええ」

「という事は、戦場ヶ原さんは阿良々木さんの事で人生という道に迷っているんですよ！よつて迷っている戦場ヶ原さんにアニメになると途端に優柔不断になるエロゲーの主人公達も裸足で逃げ出すほど迷っていた私が見えてしまっても何の不思議もないんですよ…」

僕は本日何度目かの嘘でしょマークを八九寺に向けて使つた。

では問題が解決したのにNで和が单場を原

「インタビュー形式?普通に聞くだけじゃ駄目なのか?」

「ええ、先日ラジオのパーソナリティーごっこをしましたので今回

「お前生の間金一里令ギンニシヤギーは

「ばさねえ、惜しい人を亡くしました・・・」

「羽川はまだ死んでないからな」

四話目（後書き）

「私も友達はいなかつたけど定期的に話しかけてくる男子はいたわ
「これが友達になりたいけどなれない人と友達になりたくない人の
違いですね」

「・・・」

よかつたら他のやつも読んでね

五話目（前書き）

僕は八九寺真宵ちゃん！

「その推理は少しおかしくないかしら」

「僕と八九寺のやり取りを見ていた戦場ヶ原が割つて入つてきた。

「確か八九寺ちゃんはこの前の母の日以来、迷い牛からは解放されたはずよね？」

「ええ、お陰さまで八九寺真宵は自縛靈から立派な阿良々木さんの守護靈へとクラスチェンジしました」

「いつからお前が僕の守護靈になつたつて？」

ため息をつきながら八九寺の自慢げな顔を見る。

「何を言つてるんですか、阿良々木さん。私はいつでも阿良々木さんの事を近くで見ていますよ？ついでに言えば阿良々木さんが悪さや粗相をするたびに私が羽川さんに報告する仕組みになつています」「こえーよ！その行為は僕とお前に何のメリットがあるんだよ！」

「メリットなんてありませんよ。常に私が被害に会つてはいますけど。ついこの間も阿良々木さんが手馴れた様子で買った大人の本のタイトルを一言一句間違えずに羽川さんに報告したところです。阿良々木さんは少女になんて言葉を言わせるんですか」

「知らないよ！いや、知つてるけど待てよおい。つてことは羽川にも知られちゃつてるのか？」

「ええ、あの方は何でも知つていますよ。エッチなことだけ」

八九寺はうんうんと一人で頷きながら、励ますように僕の肩を叩いた。

こんなガキにリズムだけでひどい事を言われてるぞ、羽川。

「あの、そろそろいいかしら？」

戦場ヶ原が待ちくたびれた様子で片目だけを開けたまま僕を睨みつけた。

「色々言いたい事や折りたい箇所はあるけれど、話を前へ進めましょ。結局、八九寺ちゃんは迷い牛から離れたのでしょうか？なら私

がいくら悩んで迷つたといひで見えるよりはなるとは思えないのだ
けれど

「んー、そうですねえ。ではこいつ考えてみてはどうでしょうか。戦
場ヶ原さんが蟹に出会つたのは阿良々木さんや私に出会つ前でした
よね？つまり最初から戦場ヶ原さんには少なからず怪異の類を見る
力があつたんですよ。そして私の存在は迷い牛のせいで家に帰りた
くない人達にしか見ることが出来なかつた。しかし迷い牛と言う縛
りがなくなつた今、見えるのに見えなかつたものが見えるようにな
つた。邪魔な物をとっぱらひ隠されていた物が見えるようになった
といつ認識でどうでしょ？」

「なるほどな。まあ隠されていたものがこいつだつたつてといひが
残念だけど」

「何を言つているんですか、阿良々木さん。今や少女は国宝級の扱
いを受けているんですよ？阿良々木さんのような危険人物は挨拶し
ただけで飛んできた警察官に連れて行かれます。言い訳なんて聞い
ては貰えません。即刻牢屋行きです！」

「ひどい世の中だよ・・・」

「ゴホン、ではでは遅くなりましたがインタビューをはじめようと
思ひます」

ハ九寺はどこからか持つてきたマイクを戦場ヶ原に向けた。
戦場ヶ原は露骨に嫌そうな顔をして、僕に向かつて田で抗議してく
る。

子供嫌いに拍車がかかつたな・・・。

「ではまず、あなたのお名前は？」

「・・・」

「あのー、戦場ヶ原さん？」

「言いたくありません」

「つづ」

小学生をキツと睨みつけ無言の圧力を与える戦場ヶ原。

まさにヘビに睨まれたカエル状態。

いや、この場合は力二に挟まれたカタツムリか。

今度は完全にひるんで青くなつたハ九寺が田でSOS信号を送つてくる。

しかし僕は僕で先ほどからつま先を戦場ヶ原のかかとで踏みつけられている。

これ以上痛くされるのは「めんだ。

僕は泣く泣くハ九寺の救援要請を無視することにした。

「何だか押野さんに質問された時の事を思い出して不愉快だわ」

そんな考えも虚しく、プロレスでTKO勝ちした時の「コングぱりに何度も何度もすねを蹴られる。

「痛いっ、痛い！・・・・・気持ちは分かるけど、少し付き合つてやってくれないか？」

「・・・・」

戦場ヶ原は可否を言わずに無表情のまま僕の足を蹴り続けた。

「むう・・・・・しようがありませんね。それでは戦場ヶ原さんには強引に素直になつていただきましょう」

そう言つてハ九寺は机の向かい側へ行き、リュックサックの中をこそそとあさり始める。

あつたあつたと言つて取り出したのは何の変哲もない5円玉だった。

「これに糸を通して・・・・・出来ました」

ハ九寺が十秒ほどで作り上げたのはお茶の間でよく知られる催眠術の小道具だった。

「ふつふつふ・・・・・いきますよ。あなたはだんだん眠くなる、あなたはだんだん眠くなる、あなたは・・・・・お約束だな。

「起きる、ハ九寺」

「羽川さん、阿良々木さんが委員長物のエツチな本を買つていまし

たよ・・・・・」

「寝ながら言つた寝言でも言つて良いこと悪い事があるが。おら、

起きるハ九寺」

ハ九寺の頭を平手ではたく。

「はつ、私寝てましたか？寝てる私に何かしましたか？」

「何もしてない。僕に対するお前の悪意が見えただけだ」

「はあ・・・何故私はこんな場所で茶番を見せられているのかしら」

戦場ヶ原は呆れた顔で窓のはまつていらない窓枠の外を眺めた。

「ふつふつふつ、そんなすまし顔でいられるのも今のうちですよ、

戦場ヶ原さん。あなたはだんだん眠くなる、あなたはだんだん眠くなる、あなたはだんだん素直になる、あなたはだんだん素直になる・

・・もう一度聞きます。あなたのお名前は？」

戦場ヶ原の首がかくんと前に倒れた。

「・・・戦場ヶ原・・・ひたぎ・・・」

五話目（後書き）

「お悩み相談は何処へいったのよ
「「・・・」
よかつたら他のやつも読んでね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2892z/>

相談物語

2011年12月27日21時57分発行